

I 「主体的に学習に取り組む態度」の評価の実践例

1 「社会科の本質」と評価の関係

社会科は、生徒の「科学的社会認識を通して市民的資質を育成する」教科である。「科学的」に、つまり生徒が理論（仮説）を事実に基づき吟味・修正（反証）していく中で、発見や習得をしていくことが「社会がわかる」ということであり、「社会認識」が形成された状態であると捉える。そして、「社会認識」を基盤として思考し、合理的判断をすることで、市民としてふさわしい行動をする能力「市民的資質」が養われる。確かな社会認識を科学的に形成し、市民的資質を育成することこそ、社会科の授業づくりである。

「主体的に学習に取り組む態度」は、この「社会認識」の形成を促進するとともに、社会科が育成すべき「市民的資質」に他ならないと言える。そして、この「主体的に学習に取り組む態度」は「子どもが元々もっているものではなく、教師が育てるものである」という理論を前提とする。この前提に立てば、教師が授業において育成できたのかどうかを評価する場面が欠かせないの言うまでもない。

そこで、「主体的に学習に取り組む態度」の評価場面を次の2点のいずれかと位置付け、授業構成を行った。

A：生活や他の学習に生かそうとしている

B：学習課題に対する予想を「仮説」へと高めている

2 授業構成と評価場面の実際 <事例1>

A「生活や他の学習に生かそうとしている」の場合

3年 公民的分野

「法に基づく公正な裁判の保障～模擬裁判を通して～」

(1) 単元の目標（主体的に学習に取り組む態度）

現代社会を捉える枠組みについて現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わろうとしている。

(2) 身に付けさせたい（育成させたい）力

司法に関する教育は「法教育」もしくは「法育」と呼ばれている。例えば、「法育」の定義（杉山和之 2015）は「模擬裁判教育を中心としたアクティブ・ラーニング（主体的・共働的体験活動）である」とされ、社会の在り方を考え、民主的な社会の一員として主体的に生きるための自覚と能力を育む効果があるとされる。

また、法教育を行うことは次のような力を身に付けることが一般的に期待できるとされる（前掲2015）。1つ目は「社会規範を知る」、つまり犯罪は身近にあることを知ると同時に、社会規範に触れさせることができること。2つ目は「論理的思考力」、つまり相手の話を聞き、思考を整理しながら論拠を推測し、主体的に判断して、自分の考えを論理的にまとめることができるようになること。3つ目は「自己表現力の向上」、つまり立場や状況に応じた話し方や態度を考えることができ、表現方法を工夫するようになる。意見が異なる人と話し合うので、自分の考えの論理的根拠をもとに説得力のある話し方をして、相手の心を動かす伝え方を学ぶことができること。最後に4つ目は「意志決定力と責任感の育成」つまり、自分の下した判断の結果で人の人生が決定されるのであるから、自分の発言の重要性に気付き、責任感を育成することにつながる。

これらのことから法教育を行うことは社会認識形成を通じた市民的資質育成に迫っていくことであり、社会科が目指す生徒の資質・能力の育成につながっていくものだと考える。

(3) 授業内容と事前・事後の変容を捉える評価問題

①事前の評価問題

単元に入る前に、「裁判員に選ばれたとしたら、どう思いますか」というアンケートを実施した。回答内容を挙げると、「社会の一員として結論を出すことに興味がある。」「裁判に興味があり引き受けてみたい。」「といった前向きに捉える意見があった一方で、「自分の意思で人の人生を左右することに自信がもてないし責任に押しつぶされそう。」「重大犯罪の証拠写真や被告人を間近に目にするのは正直怖い。」「仕事などを休んで裁判所に出向かなければいけないのは面倒である。」「裁判や法律などに詳しくない一般人の自分たちが公正な判断ができるかわからない。」「知らない人と話をすることや、意見が分かれたときに意見を合わせてしまいそうで自信がない。」「お互いの守秘義務が守られるのか、被告人から逆恨みをされるのではないかとと思うと怖い。」「といったものが大半を占めており、市民的資質育成について、課題点が見受けられる。

②授業内容（概略）

◎単元を通した問い
1. 「裁判員はどのような思いで判決を出しているのだろうか」
○模擬裁判員裁判において、あなたたち裁判員はどのような判決（評議）を出すか。 ・模擬裁判の「公判」場面を想起する。 ・「評議」の「事実認定」における論点整理を行う。
1 事実認定「被告人に殺意があったのかどうか？」 「もみ合い」の有無と殺意の有無の認定を行う。 ・殺意は認められ、殺人未遂罪が適用される。 ・殺意は認められず、傷害罪が適用される。 ➡事実認定の中でも、人の心の中のことを証拠や証言に基づいて、裁判員として客観的に認定しなければならない難しい場面である。
2 「被告人は有罪か、それとも無罪か？」 ・公判前整理で論点になっていない。
3 （有罪の場合）「量刑はどれくらいが適当か？」 ・情状酌量や過去の判例に基づいて判断する。
4 判決を出すに至るまでに感じたことや裁判員制度の意義について考えたことを発表する。

③事後の評価問題

模擬裁判員の授業後に「模擬裁判員を行ってみてどう思ったのか」について書かせた。回答を見ると、「裁判員という司法を体験したことで、人を傷つけるということは良くないことだと感じた。また、裁判員制度への興味が深まった。」とあった。これは法教育が目指す力の1つ目「社会規範を知る」にかかわるものである。

続いて挙げると、「物事を根拠に基づいて公正に見て、自分で判断することが体験を通して分かった。」「被告人等の人生を左右する判断をすることは荷が重い、一方で客観的な目で見ることが付いたと思う。」といったものであり、これは法教育が目指す力の2つ目「論理的思考力」にかかわるものである。

また、「意見があっても言えないことがあったが、積極的に発言できるようになった。」とあり、これは法教育が目指す力の3つ目「自己表現力の向上」にかかわるものである。

そして、「ドラマやニュースよりも重いものを感じた。責任を感じた。」「自分の判断で人の人生を180度変えてしまう可能性もあるので、今回のケースでは事実認定を下すところがとても心苦しかった。」とあり、これは法教育が目指す力の4つ目「意志決定力と責任感の育成」にかかわるものである。このように模擬裁判の授業を行ったことで、法教育が目指す4つの力が身に付いたと判断することができる。

（4）成果と課題

①成果

模擬裁判の単元開発では一貫して「裁判員はどのような思いで判決を出しているのだろうか」という学習課題を立てている。これは、判決を出すまでにどのように法的に情報を処理するかという判断を問うものであると同時に、社会に生きる市民として人の人生にある一定の判断を下すことの意義について捉えさせるという目的もあった。この点については、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の視点A「生活や他の学習に生かそうとしている」として、一定の効果が表われたと言える。

②課題

公民的分野で扱う事象や学習課題は、地理的分野や歴史的分野と比較して、社会問題を直接的に扱うことから、生活や他の学習に生かすという視点で授業を構成できるが、地理や歴史においても、生活や他の学習に生かすような学習課題の在り方については、今後も研究が求められる。

【参考文献】

- ・杉山和之「模擬裁判と法育効果について」『九州法学会会報』2015, pp9-13によれば、法育と法教育は厳密には異なるとしているが、ここでは法育の中心として、模擬裁判教育が挙げられている。
- ・拙稿「中学校社会科学習における市民的資質育成を目指す法教育～公民的分野「裁判員制度」の単元開発～」『教育実践研究』富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要14号2019, pp1-10

3 授業構成と評価場面の実際 <事例2>

B「学習課題に対する予想を『仮説』へと高めている」の場合

1年 歴史的分野

「古代国家の成立～ギリシャ・アテネの民主政～」

(1) 単元の目標「主体的に学習に取り組む態度」

古代の歴史的事象に対する関心を高め、意欲的に追究して古代の特色を捉えようとしている。

よりよい社会の実現を視野に、古代の歴史的事象から現代社会とのつながりを見つけ、現在や将来の生活に生かそうとしている。

(2) 授業内容（概略・詳細は次項の実践事例1を参照）

学習活動と生徒の反応	指導上の留意点
1 本時の学習課題を確認する。 古代ギリシャやローマ市民にとって、最も理想的な政治のしくみといえるのはどれだろうか。	
2 小グループで意見交換する。 3 全体で意見交換する。 ・一人の支配 ・少数の支配 ・多数の支配 4 反論がないか、全体で意見交換する。 ・どの形態にも是と非がある。	・最も理想的な政治として生徒が選ぶと考えられる「多数の支配」にも負の側面があることに気付かせ、批判的に考察させる。
5 「民主主義」（多くの人が政治などの決定にかかわるしくみや考え方が取り入れられている現代において、よりよい社会を実現するために、社会を構成する市民として、私たちが気を付けなければならないことや大切にしなければならないことは何か、学習を通して考えたことをまとめる。	・3つの政治のしくみのよい点や課題を考察してきたが、今日の政治にもつながる、多くの人が決定にかかわるしくみにも課題があることに気付かせる。

(3) 「主体的に学習に取り組む態度」の評価理論

「主体的に学習に取り組む態度」は学習を調整する力が含まれている。この力については、次のi～iiiの場面での評価が妥当であるとし、授業を構成した（米田編著 2021）。

i) 既習知識を活用し、学習課題への仮説を立てる場面
ii) 対話により習得した内容をもとに、学習課題への仮説を立てる場面
iii) 学習課題解決後に、「新たな問い」を立てる場面

なお、ここでいう「予想」と「仮説」の相違は次のようになる。

予想：学習課題に対して当て推量で書けている、発言しているもの。
仮説：これまでの社会の授業で得た知識を使って、書けている、発言している。

以上の点を踏まえ、i～iiiにおけるA・B・Cの評価規準を作成した。また、生徒の回答をいくつか挙げる。

i) における「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

	評価規準の具体
A	前時までには習得した知識を活用して、複数の仮説を立てることができる。
B	前時までには習得した知識を活用して、仮説を立てることができる。
C	当て推量のみで予想を立てている。または、予想も立てることができない。

ii) における「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

	評価規準の具体
A	対話の中で、自分の考えが「変わる・増える・深まる・決まる」きっかけとなった発言を複数示している。また、それらの発言を受け、自分の考えがどうなったのか記述している。
B	対話の中で、自分の考えが「変わる・増える・深まる・決まる」きっかけとなった発言を示している。また、それらの発言を受け、自分の考えがどうなったのか記述している。
C	A, Bの規準を満たす内容を記述していない。

《生徒のワークシートより》（一部要約・抜粋）

今日の話し合いで、それぞれの支配のよい点や悪い点が見つかりました。私は「多数の支配」がよいと思っていましたが、「多数の支配」は時間がかかる、身分が分かれてしまうなどの意見が出てきて、改めて他の支配もよいと思いました。（生徒Rさん）

今の日本は民主主義で、昔のように全く政治に参加できないということはないけれど、今日みんなの意見を聞いて、みんなの意見が反映されることは国にとってよいことだと思いました。だから、政治に参加するためにも、自分の意見を押しつけるのではなく、自分の意見を発信していきたいと思いました。（生徒Sさん）

《生徒のワークシートより》（一部要約・抜粋）

古代ギリシャ・ローマの政治から、民主主義は多数決で世の中を動かすけど、世の中を動かすということは、人数が多ければ多いほど意見のすれ違いが生まれるなど、みんなの意見が全て反映されるわけではないと思った。だから、私はみんなの意見をより多く取り入れることが、みんながよりよく生活するために必要だと思った。（生徒Tさん）

古代ギリシャ・ローマの政治が今につながるものとして、たくさんの人々が政治に参加する（多数の支配）と市民ン位参政権があるといったものが挙げられることから、自分たちで国をつくっていくには、結局は一人一人の意見が大切だと思った。（生徒Uさん）

iii) における「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準

	評価規準の具体
A	「新たな問い」が、a～cに当てはまっており、単元の学習で習得した知識をもとに問いの理由付けができています。 a：新たな社会事象への応用 b：深まった「問い」の発見・探究 c：価値分析・未来予測
B	「新たな問い」が、a～cに当てはまっている。
C	A, Bの規準を満たす内容を記述していない。

また、iiiの「新たな問い」を生むための教師が投げ掛ける「問い」として、次のような「問い」が効果的であると考える。

- ・「よりよい社会の実現」に向けて、～するにはどうすればよいだろうか。
- ・「歴史」から何を学びますか。
- ・「今の生活」に生かせることはありますか。など

歴史的分野の学習では、次のような「問い」を単元と単元をつなげて設定していくことが考えられる。

- ・古代の政治を学習した後
➡「現代を生きる私たちは何に気を付けるべきか」
- ・戦時下の日本を学習した後
➡「戦争が起こらないようにするにはどうしたらよいか」

(4) 成果と課題

①成果

古代民主政の性格を考察することを通して、主権者の育成という観点から、「民主主義」の優れている点や課題を踏まえ、よりよい社会を実現するために、社会を構成する市民として、気を付けなければならないことや大切にしなければならないことは何かを説明することができた。

②課題

学習活動の中で、評価（生徒の見取り）をどのように行えばいいか、検討が必要である。具体的には、話し合いを通してどのように意見が変わったかを把握したり、予想から仮説に変わったりする場面における「問い」の在り方である。また、単元の終わりに生徒の中で新たな「問い」を設けさせるような教師からの問い掛けが必要である。

教師側が視点をもって問うことで、「主体的に学習に取り組む態度」における生徒の発言やワークシートの記述を、評価することが可能となる。

【参考文献】

- ・米田豊編著『「主体的に取り組む態度」を育てる社会科授業づくりと評価』明治図書2021

(文責 坂田 元丈)